

谷中圓朝まつり：会場（全正庵）

全正庵は、禅宗の一派である臨済宗の寺院であり、近代日本史における画期的な出来事と密接な関連があります。建立したのは、1868年の明治維新において重要な役割を果たした有名な侍、山岡鉄舟（1836年～1888年）です。明治維新では、明治天皇（1852年～1912年）が武家政権の徳川幕府を打倒し、新しい国家元首に就任しました。

山岡は、最後の将軍である徳川慶喜（1837年～1913年）に仕える高位の護衛でした。慶喜は1868年3月、江戸（今日の東京）の開城を交渉するために側近を派遣しました。この時までに、明治天皇に忠誠を誓う新政府軍は、進行中の内戦で優位に立っており、幕府の首都まで接近していました。山岡は、武力に頼らず江戸を奪取するよう新政府軍を説得することに成功し、江戸を確実な破壊から守り抜きました。

しかし、国の新しい指導者らと、昔からの残存勢力が戦った内戦は、1869年6月まで続き、最大で1万人が犠牲になりました。天皇に仕えるなか命を落とした人々の魂は、東京招魂社（今日の靖国神社）と名付けられた新しい聖域に祀られました。しかし、敵側の戦死者にそのような名誉は与えられませんでした。明治天皇の顧問として信頼を得て、侍従にもなった山岡は、この間違いを正すことに決めました。山岡は、誰に忠誠を誓っていたかに関わらず、戦争の全ての犠牲者を追悼するため、そして、本人の見方では、新政府の積極的な西洋文物の採用により存続が危ぶまれていた、侍の伝統を保護するために、全正庵を創立しました。

他にも、山岡の寺の名称には興味深い歴史があります。鎌倉（東京の南）に建長寺を創立し、それに関連する臨済宗の一派を立ち上げた、中国生まれの仏僧、蘭溪道隆（1213年～1278年）にゆかりがあるのです。13世紀のある時、蘭溪道隆は海路で鎌倉に渡る際、船が制御を失い、当時は沿岸部であった、今日の谷中付近に漂着しました。難破した禅師は、角谷と呼ばれる地元の一家に助けられたことから、自ら筆を執った書を一家に贈りました。この掛軸には、全正庵（「あらゆる命の庵」）の文字が書かれており、角谷家で数世紀にわたり受け

継がれました。

1870 年代後半、天皇の侍従であった山岡鉄舟は、谷中にあった角谷の店に、蘭溪道隆の書が掛けられていることに気づきました。店主は、天皇の右腕であった山岡に、家宝を寄贈することに決めました。山岡は、自分の書齋に掛軸を掛け、部屋の名前を全正庵に変え、後には自分の寺にも同じ名前を採用しました。この寺は、蘭溪道隆の船がおよそ 800 年前に岸に打ち上げられた、まさにその場所に位置していると言われています。